

東方四季 ～夏の章～



# 東方四季 夏の章

## 東方四季 夏の章

幻想郷の夏。

今日も幻想郷は平和である。

博麗神社の巫女は特に異変がない普段は家事をこなし、余った時間で麓の人里に提供する札を作っている。しかし最近はその

れが滞っていた。理由は単純明快。今年の夏は例年よりも暑いのである。そのせいで人間だけでなく妖怪すらもいつもよりのんびりとしていた。

### ◇博麗神社 縁側◇

「あー……暑っついわー」

博麗神社の境内のちょうど真反対の縁側に二人の人物が座っていた。

巫女であり年頃の女の子であるはず彼女、博麗霊夢だが、周囲を気にせず袴をめくりパタパタと扇子で中を扇いでいる。側には魔理沙だけだったというのもあるが、その姿はなんともはしたない。

「なんで日陰でも暑いんだよ。も一嫌になるわ…」

暑さのせいか言葉さえも途中から疲れて聞こえる。霊夢は思った。これがもし何かの異変ならば早急に異変を起こした主をぎったんぎたんにしてやるのにと。

「ここよりもどっか涼しいところはないもんかなー」

遊びに来ていた霧雨

魔理沙も最初こそ空を高速で飛んで来たため汗もほとんどかいていなかったが、今では霊夢同様にパタパタと団扇でスカートの中を扇いでいた。

この神社は周囲の森まで少し距離があるために木陰がなく、ガンガンに照りつける太陽の前にはどうすることもできない。せめて近くに川でも流れていればもう少しましなのだが。

さらに暑さのせいか最近では来訪者も減っている。今でもよく来るのは魔理沙や文、萃香くらいのものだ。

「川で水浴びしても結局帰りがしんどいし。そもそも外に出るのが嫌だわ。かと言ってこのままここでこうしていても何の解決にもならないわけけど」

「この神社に川でも引いてくるか？」

冗談っぽく言ったはずの魔理沙の眼は本気の眼だった。たしかにマスタースパークの威力を持ってすれば、本気で川を引くこともできるかもしれない。

「やめなさい。嵐でも起きたら神社がめちゃくちゃになるわ。でも、どうし

てくれようかしらこの暑さは本当に」

いくら文句を言ったところで気温は変わらないむしろイライラするほど熱く感じてしまう。

「……そうだ！ チルノを連れて来たら涼しいんじゃないか？ 氷の妖精なんだし。居るだけで少しは快適になるはずだぜ」

「……なるほど。たしかにあいつがいたら涼しくなりそうね。でも大丈夫かしら？ もう溶けてたりして」

あの妖精は態度が大きい割にとても頭が残念なことで有名だ。今頃この暑さで溶けて水の妖精にでもなっているのではないだろうか。

「なーに、妖精は死んでもすぐ復活するはずさ。それにあいつはああ視えて案外しぶとい」

「…それもそうね。とりあえず行ってみましょうか。ここでこうしても暑いのは変わらないし」

#### ◇紅魔館付近 湖◇

鬱蒼と茂る草々に囲まれた湖。妖精がよく遊び場として寄ってくるこの

湖にチルノはいる。基本的にはこの湖で過ごす彼女はこの周辺を飛び回っていることが多い。

「おーい、チルノー。どこだー？」

二人は飛び回りながらチルノを探す。声を出しながら辺りを見回して湖の周りをグルグルと周回する。

「どうでもいいときにはいるくせに、どうしてこういうときにはいないのかしら。まったくもう、これだから妖精ってやつは」

自分勝手なことを霊夢が言い始める。暑さでいつも以上に言葉が辛辣になってきていた。額には汗がじんわりと浮かび、むっとした表情は変わらない。

「おかしいな。いつもはこの辺をうろうろしてるのに。どこか別のところで遊んでるのか？」

普段からよく紅魔館に出入りしている魔理沙は通り道にチルノをこの周辺でよくみかけていた。しかし今日はどうも姿が見えない。どこへ行ったのだろうか？

突然、霊夢ははっとして顔をあげた。

「……いいえ。違うわ魔

理沙」

「んっ？」

霊夢の声に魔理沙は顔を後ろに向ける。

ちょうど霊夢と顔を合わせるような形になる。

「きっとチルノは連れ去られたのよ！」

霊夢は大きく頷きを繰り返しながらそう言った。

「はあ？ そんな馬鹿なチルノを連れていくようなやつなんているか？」

チルノは普段からお調子者が態度がでかく、そのくせあんまり強くないというやつである。同じ妖精たち以外の妖怪にはあまり相手にされないことが多い。そのチルノが果たして連れ去られるような価値などあるだろうかと魔理沙は不思議に思った。

「私たちが考えることを他のやつらが考えないはずがないわ。きっとすでに何者かがチルノを連れ去って一人だけ涼しい思いをしているに違いないわ！ 許せないッ！」

普段はクールな霊夢だが、こういう風になってくると融通が利かないのが彼女の悪いところだ。

「ふむ、なるほど。たしかに今年はみんなこの暑さに参っているからな。

私たち以外にチルノを連れて行こうとするやつも出てくるかもしれない。ちくしょう！ 私たちを差し置いて涼しい思いをしようなんて、絶対に許せないぜ」

「こうなったら手当たり次第にチルノを連れていきそうなやつらを探し回るわよ！」

「ああ！」

こうして二人はチルノを探すことにした。まずは手始めにこの近くにある紅魔館を目指すのだった。

## ◇紅魔館 門前◇

紅魔館の門の前に一人の人物が立っていた。紅美鈴。紅魔館の門番兼妖精セキュリティ隊のトップである。帽子には竜の文字が光る金色のバッジが付いている。服装はチャイナドレスのようなスリッパの入った機動性に長けたものである。いつも通りに門番を続ける彼女は今日も平和に過ごしていた。

「ふあ——ああああ……んんっ。今日も平和です

ね一。世はこともなし。  
平和が一番です。でも、  
あんまり平和すぎると眠  
くなってきちゃいますよ  
ふわーあつ」

毎日この門を守る彼女  
だが、そうそう来訪者は  
あらわれぬ。なぜなら  
この館に来るような者は  
そうはいないからである。

館の主であるレミリア  
に喧嘩を売るような妖怪  
はそうそういない。また  
この館の住人はほとんど  
外出をしない。そのため  
内からも外からもこの門  
に近づく者は少ないのだ  
館はこの正門以外には結  
界が張られているため侵  
入はできない。この門だ  
けが唯一の通り道なので  
ある。

まあ、一部例外の者た  
ちもいるようだが…。

「ふう……おやつの時間  
はまだですかねー……  
…おや？ 誰か来ました  
か？」

美鈴は何者かがこちら  
に飛んでくる気配を感じ  
その方角に眼を凝らした。  
—すっ、と眼を細めて見  
ると二つの影がものすご  
いスピードでこちらに向  
かってきている。影は次  
第にその姿が確認できる  
近さまで近づいてきた。  
その人物らを確認して美

鈴は手を振った。人影は  
知り合いの霊夢と魔理沙  
であった。

「あ、こんにちは霊夢さ  
ん、魔理沙さん。お嬢様  
に御用ですかー？」

少し遠いが十分声は聞  
こえるであろうくらいの  
大きさと美鈴は話しかけ  
る。一応知り合いであつ  
ても門番は訪問者の訪問  
理由などについて聞いて  
おかねばならないためだ。  
しかし声が届いていない  
のか二人がスピードを緩  
める様子がない。

「あれ？ 聞こえてない  
のかな……」

仕方なく二人が門の前  
に来るまで暫し待つこと  
にした。ほんの一分ほど  
で来れる距離だ。慌てる  
必要などない。

無理やりに門を突破し  
ようとしぬ限りは門番  
は動かない。むしろ客人  
には礼儀正しく対応する  
のが仕事である。

「ん、来ましたね。こん  
にちはお二人さん。本日  
はどのようなご用件で…  
…」

美鈴が一礼を終えてさ  
すがに聞こえるだろうと  
いう距離で話しかける。  
しかし頭を上げた目の前  
には尚も速度を緩めない  
二人が門に向って突っ込

んでくる姿が見えた。

「「どけえええー！」」

鬼の形相とはまさにこのところだろう。本物の鬼以上の迫力を醸し出す二人は大声で叫びながら紅魔館の正門に突撃した。

「ひいいいいーっ！」

いくらなんでも不意をつかれては弾幕を張ることさえできない。美鈴はさっと頭を抱えながら地面に伏せた。二人が頭上を通過した際にぶわっと風が吹き抜ける。

「ふうー...まったく、いきなりなんなんですか。危ないですねー.....あああああ！ 通しちゃった.....また...咲夜さんに怒られる...」

### ◇紅魔館 館内◇

紅魔館内の廊下に咲夜はいた。いつも通りの着なれたメイド服を着てこの長い廊下の掃除を行っている。窓の外に見える

花壇を時折眺めつつ手際よく掃除を続ける。

もう少ししたらおやつの日だ。今日は良い紅茶が手に入ったのでお嬢様も喜んでくれるだろう。そんなことを考えるとついつい頬が緩んでしまう。

—ガッシャー———ン  
ンツツ！！！！

不意に大きな音が玄関の方から聞こえてきた。何事だろうか？ 誰かが花瓶でも落としたのか。

「はあ...とりあえず行ってみましょうか」

◆

玄関扉の前には霊夢と魔理沙が頭をなでながら廊下に座っていた。

「痛っててー...おい—霊夢—。急に止まるなよ。頭ぶつけちゃったじゃないかよ」

「止まらなかったら今頃扉に頭ぶつけて気絶してたわよ。ってか止まれなようなスピード出すんじゃないの。私まで押されて頭打ったじゃないの」

「霊夢だって同じスピードだったじゃないか」

「私はすぐに止まれるのよ」

「ちょっと、あなた達」

咲夜が玄関に着くと二人が少し言い争いをして

いる最中のようなだった。しかし咲夜にとってはそんなことどうでもいい。強引に扉を開けて入ってきたのは一目瞭然のあり様だった。扉は大きく開かれ、衝撃で飾ってあった花瓶は割れ、中の花も水ごと廊下にぶちまけられていた。

「ずいぶん派手に入ってきたものね。門番からは来客の連絡はなかったけど？」

「門番？ ああ、そんなやつもいたな。なんか頭抱えてうずくまってたけど」

「……おやつは抜きね」

紅魔館の門番ともあろうものが頭下げて侵入者を見過ごすとはどういう了見だろうか。今度きつくお仕置きしなくちゃならないようだ。

「それであなたたち、いきなり押しかけてきて何の用なの？」

「ん？ レミリアにちょーっと聞きたいことがあってねえ」

「ああ、素直に通してくれたら悪いようにはしないぜ？ 通さないって言っても勝手に通るけどな」

魔理沙と霊夢は謝るところか不敵な笑みを浮かべている。咲夜はカチン

ときた。今のこの二人は来客ではなく侵入者だ。ならばそれ相応の扱いをさせてもらおう。

「残念だけど、鼠にお嬢様を会わせるわけにはいかないわ。ここでお引き取り願いましょう。次に来る時はアポイントメントを取ることをお勧めする…わッ！」

言い終わるよりも早く咲夜は弾幕を打ち付けた鋭いナイフ形の弾幕が二人をめがけて何十本も放たれる。

「おっと」

二人は向かい来るナイフをさっと避ける。霊夢は小刻みに動きながら紙一重で。魔理沙は素早い動きでナイフのまとまりごと大きく避ける。

二人を分断したところで咲夜は魔理沙を集中して狙い始めた。大きな動きを取る魔理沙に狙いを絞ってナイフを放つ。

—シュッ！

魔理沙に先ほどよりも拡散されたナイフ弾幕が大量に向かう。

「おいおい、多すぎだろ！  
くそッ！」

あきらかに咲けきれないほどの数の弾幕を前に魔理沙は舌打ちをする。霊夢よりも細かい動きが

得意ではない魔理沙は大きく塊として避けることを中心にしていたが、この広く多く打たれたナイフはかわせそうになかった。

「ふう……なら、こっちも行くぜえええっえ！」

魔理沙は一転、箒を返しナイフに向かい合う。鋭いナイフが面で襲いかかる。本物のナイフではないため刺さることはないが、それでも相当痛いことには変わりはないだろう。しかし、それは当たればの話だ。

「恋符ッ！ 『マスターパーク』！」

一撃必殺。その言葉がこれほどまでに似合う美しい一撃。魔理沙は襲い来るナイフ弾幕を前に自身のスベルカードを打ち放つ。その大きな一撃はナイフ弾幕を面まるごと焼き払い、さらに咲夜にまで勢いを殺すことなく迫りくる。

次に追い込まれたのは咲夜だった。自身が放った弾幕よりもはるかに大きなマスターパークの一撃を処理しなくてはならない。

しかし、魔理沙が避けられない弾幕をなぎ払ったほどの一撃を咲夜のスピードで逃げ切れないのはわかりきったことだった。

—ズダァァァーンンツツ！！！！

咲夜がいた周囲は煙をあげ、辺りは煙で視界が悪くなった。

「ふう……やったか」

しかし魔理沙は気を抜かない。まだ咲夜の気配は生きていたからだ。あれをくらって気絶していないということは…。

「……………なんてな。お前はこの程度ではやられたりしないよな」

「ええ、当然よ」

魔理沙の背後から声が聞こえた。煙が晴れるより早くまたもナイフが飛んでくる。それを察知していた魔理沙は緊急回避をおこなう。

「くーっ！ いつ見ても反則だよな、その能力」

「私の前では速度に意味はない。遅かろうが速かろうが、止まってしまえばどうにでもなる」

—幻世『ザ・ワールド』

咲夜の前に速さという概念は意味をなさない。彼女は時を止め、ゆっくりと弾幕を迂回する。能力で時間の止まっている間に進める距離分が咲夜の回避範囲である。

「さあ、少し早いけど次でチェックメイトさせてもらおうかしら。もう一人も相手をしないとイケないしね」

チラリと咲夜は霊夢のほうを見た。霊夢は先ほどから我関せずと傍観している。

正直、咲夜は二人同時に掛ってくるものだと思っていたのだが。正々堂々としているのか、霊夢がめんどくさがりなのか。

…おそらく後者なのだろう。

「これでおしまいよ。」

メイド秘技『殺人ドール』

」

咲夜もスペルカードを発動させる。咲夜の最終にして必殺の弾幕を。

赤と青と緑のナイフが縦横無尽に宙を舞う。それは美しくも危険な弾幕

まるで美しいがとても鋭い棘を持つ薔薇のように。

「くっ！」

「無駄よ。いくら避けようとしても、あなたにそれは避けきれはしないわ」

魔理沙の視界に無数のナイフが飛んでくるのが見えた。幾度も箒の向きを様々に変えて飛び続けるが、気がつくともナイフに取り囲まれる。小出しにスペルカードを乱発させるが、それももう底をつこうとしていた。

「いかがかしら、時を小刻みに止めながら打たれる弾幕は？ 最高に避けていくのでしょうか？」

—殺人ドール。咲夜が使う中でも最強のスペルカード。時間停止を細かく連続して使用することにより相手が認識できない位置から弾幕を放つことができる。更にはその際に咲夜自身も移動しているため相手は攻撃しようにも次の瞬間には咲夜が別の場所に移動しているため攻撃を命中させることができない。スペルカードで防ぐにしてもジリ貧になってしまう。まさに最強の名に恥じぬスペルカードである。

魔理沙もそれは理解していた。過去に幾度か戦っ

たこともあった。しかし今回はいつも以上に咲夜の動きがいい。今までは時間停止中に動いたとしても避けきれないくらいの場所にマスターパークを放っていたり、裏をかいて素早いスターダストレヴァリ工を放ち当てていた。だが今日はそれが上手いかない。このままでは…。

「ちょっと…不味い…かな？」

「残念。ちょっとじゃないわ。そして、チェックメイトよ」

魔理沙は壁際に追い込まれた。すでに辺りはナイフに囲まれ、完全に逃げ場はなかった。

「絶対絶命ってやつだな」

「袋の鼠の方があなたには相応しいわ」

咲夜が指をパチンと鳴らすとナイフが一斉に魔理沙の方を向いた。

「しばらくそこで寝てなさい」

—パチン！

もう一度咲夜は指を鳴らした。それが合図。一斉にナイフが魔理沙を目掛けて襲いかかる！

「ぐっ！」

魔理沙は襲い来る弾幕を避けきれないと判断し身を固め箒を盾にした。

少しの望みもあきらめぬ姿勢。それが今の魔理沙にできる精一杯の姿だった。

ものの数秒後に襲い来るナイフを想像し眼を閉じて気合を入れた。

……しかし、十秒ほどしても身体に衝撃はこなかった。どうしたことだろうか。まさか弾幕同士が上手いことぶつかって相殺されたとともいうのだろうか？

魔理沙は恐る恐る眼を開いた。

そこには白と紅が広がっていた。

「…霊夢」

「魔理沙、もう十分よ。よくひきつけてくれたわ」

そういうと霊夢は魔理沙に背を向けたまま咲夜を見た。

「あなた、手を出さないんじゃないの？」

「んんっ？ そんなこと一言も言っていないわよ。あんたが勝手に勘違いしたんでしょう。ただ二対一でもあんたはなかなかやっかいだからね。魔理沙を集中して狙ってたから、あんたがスベル切れするまで様子見させてもらってたのよ。もうスベルはほとんど残っていないでしょ？」

「さあ...どうかしらね？」

咲夜は顔には出さないようにしていたが内心は焦っていた。まさか霊夢がこのタイミングで手を出してくるとは思っていなかったからだ。魔理沙を倒せばそのまま連れて帰ってくれることを期待していたのだが、現実はどうもそうはいかないらしい。

それよりも魔理沙を相手にする際にスペルを使いすぎてしまった。魔理沙の弾幕に当たりこそしなかったものの、咲夜もまた魔理沙同様に当たりにくさにいらだちを感じていた。そのためいつも以上にスペルを使い、結果最後の最後で霊夢に全てまとめてはじかれることになってしまった。

「さて、どうやら相手は詰めを誤ったようだし、ここからはこちらが攻めに移らせてもらおうかしら。幸い私はまだまだ余力いっぱいだしね」

「.....」

さてどうしたものか。咲夜は考えていた。ここから先に進ませるのはメイド長としての誇りが許さない。しかし現状のままでは霊夢を倒せないことも事実。どうすれば...

「あらあら、ずいぶん楽しそうにしてるじゃない」

その時奥から声が聞こえた。幼い感じのする美しい声。咲夜は、はっとして後ろを振り返る。

そこには館の主、レミリア・スカーレットがいた。

「...お嬢様」

「楽しそうね咲夜。私も混ぜてほしいくらい楽しそうだわ」

「申し訳ありませんお譲様。鼠の侵入を許してしまい...」

「いいえ、全然構わないわ。ちょうど退屈していたところだし。それに最近全然霊夢と遊んでなかったから、霊夢と久々に遊んでみたいわ」

レミリアは口の端を釣り上げニヤリと笑った。その眼は獲物を見つけた狩人のごとき鋭く澄んだ眼だった。

「ふーん。私は嫌よ。これ以上汗なんてかいてられないわ。それよりあなたの方からできてくれたのは好都合だわ」

「...？」

好戦的だったレミリアの出鼻を挫くように霊夢は質問を投げかけた。

「ちょっと聞きたいこと

があるんだけど、チルノはどこ？」

「チルノ？」

レミリアは首を傾げたはて、どこかで聞いたことのある名前なのだが一体どこで聞いたのやら。しばしうーんと唸りながら考えてみるも答えがなかなかでてこない。それをみて咲夜が耳打ちをする。

「湖でよく飛び回っている妖精のことかと」

「んー...ああ、あれね。あいつがどうかしたの？」

「どこにいるのか聞いているのよ」

質問しているのはあくまで私だというかのよう  
に霊夢はレミリアの返しをぶった切る。

「うーん.....さあ？ 湖にいるんじゃないの？ そこにいないのなら知らないわ。湖の妖精のことなんて一々気にしてないわ。それよりも久々に楽しみましょうよ~♪」

吸血鬼の王が一妖精のことなど気にかけることでもない。そう思いレミリアは再び霊夢に狙いを定める。

「そう。ありがとう」

そう言うと霊夢は魔理沙を連れて一目散に紅魔館を後にした。まさに脱

兎のごとく。あまりの引き際の良さにレミリアも咲夜も声をかけるのを忘れてしまうほどに。

「なんなのよあの子達...」

後にはあっけにとられた咲夜と、えっ？ これ  
で出番終わり？ どうみても咲夜のピンチにかけてつけて戦闘引き継ぎフラグだったじゃない！ と内心文句ダラダラのレミリアがぼつりと置き去りにされていたのだった。

## ◇妖怪の山 川辺◇

紅魔館を後にした二人はその後辺りをうろうろしながら妖怪の山に来ていた。本来ならチルノを探しているらんなところを回りたいたいところだったが、魔理沙は先ほどの戦闘で体力を使い、霊夢は暑い中幻想郷を一回りするなんてめんどくさいことはごめんだった。

そして二人は山の川辺で岩に座り水に足を浸しながらぼーっとしていた。「あー結局チルノは見つかなかったな。どこいてんだかあいつは」

「もういいわ。ここでしばらく涼しんでいきましょう。夕方になれば気温も低くなるはずだし。それから帰ればいいわ。ついでにここで夕飯の魚でも獲ろうかしら」

二人がそんな話をしていると後ろの方に人の気配を感じた。ざっざっと歩いてくる足音が聞こえる。二人は上半身をひねり肩越しに後ろを振り向いた。

「おや、珍しいですね。お二人ともこんなところでなにを？」

そこには守谷神社の巫女である早苗がいた。手には袋がある。どうやら買い出しに行っていたようだ。

「見てわからない？ 水浴びよ。うちの神社じゃ暑くて仕方ないの」

「ああ。日陰でもめっちゃくちゃ暑くてな。チルノでも捕まえて涼しもうとしたら肝心のチルノが見つからない。仕方なくここで涼しくなるまで待ってるのさ」

霊夢と魔理沙は現状について簡単に説明した。それを聞いて早苗はふむふむと頷き、何か考えているようだった。そして少ししてからこんな提案を二人にした。

「ふむ、なるほど。それでしたらうちの神社に来てみませんか？ ここよりも快適に過ごせると思いますよ。その様子ではお昼もまだのようですし」

#### ◇妖怪の山 守谷神社

◇

霊夢と魔理沙は守谷神社に辿りついた。辺りは霊夢の神社と違い、森に囲まれいかにも涼しげである。この時点ですでに気温が数度違うのではなからうか。

「なーんか妖怪の山って感じがしないよなあ。森に囲まれていかにも神聖って雰囲気だし。むしろ霊夢のとこの方が...」

「悪かったわね、うちの方が人里に近いのに妖怪

神社っぼくて」

二人はそんな他愛もない話をしながら早苗の後についていく。霊夢と魔理沙は歩くのが面倒なので地面ギリギリを飛んでいた。

神社の正面からぐるりと回りこみ、やがて神社の裏手へと案内された。

「ようこそ守谷神社に。ゆっくりしてってくださいね。うちの中は涼しいですよ。今お茶を用意してきますから」

にこりと早苗は微笑みながら二人を室内へと促す。

「日陰になればもうどこだっていいわ。あー暑い水浴びしたから少しはマシだけど」

「だな。水浴びしなかったらもう倒れそうだったぜ」

二人はへとへとになりながら部屋の中へと入っていった。

#### ◇守谷神社 室内◇

部屋に入った霊夢たちは驚いた。

「……なにこれッ！ め

ちやくちや涼しいじゃない！」

「な、なんだ！？ 何が起きてるんだ？」

二人は驚き戸惑った。室内に入った途端に冷たい空気が身を包み、まるで秋のような涼しく過ごしやすい環境だった。

そこに早苗がお茶を持ってやってきた。

「驚いていただけましたか？ 実は河童のにとりさんに頼んで『クーラー』をつけてもらったんですよ」

「『クーラー』？ なんだそれ？」

聞きなれない言葉に魔理沙は首を傾げる。

「私のいた世界のものなんですが、簡単に言ってしまうと部屋の中を涼しくするものです。あの機械です」

早苗は窓の天井付近を指差した。そこには大きな箱のようなものが取り付けられており、ゴーと音がしている。

「あー…きもちいい♪」

霊夢はすでに『クーラー』の下に陣取りその冷風を堪能していた。

「…これってにとりに頼んだら博麗神社にもつけてもらえないのか？」

「さあどうでしょうか？

私は『クーラー』の話をしたらにとりさんが面白がって作ってくれたんですが」

早苗もまさかここまで本物そっくりに作り上げてくれるとは予想外であった。しかも電源はソーラパネルのようなものを使っているため、日差しが強くなる日は快適に動き、曇ってあまり暑くならない日はほとんど機能しないというものだった。「よし！ 行くわよ魔理沙」

霊夢は立ち上がりお茶を飲み干すと魔理沙にそう言い放った。

「ええっ。今から行くのか？」

「当り前じゃない！ 善は急げ、思い立ったが吉日よ！」

そう言うと霊夢は魔理沙を連れて一目散に神社を後にした。早苗はもう少しゆっくりしていけばいいのにとも思ったが、無理に引きとめようとはしなかった。

## ◇妖怪の山 にとりの小屋◇

妖怪の山、川辺の上流河童たちの住む流域とは

少し離れたところに、にとりの小屋があった。普通の河童たちは人見知り人間を見るとすぐに逃げてしまう。しかしにとりは違った。人間を河童の盟友と称し自ら進んで関わって行くことが多々あった。そんな盟友の中に霊夢や魔理沙は含まれていた。

「おーい、にとりー！」

魔理沙は小屋の外からにとりに呼びかけた。彼女は普段からこの小屋の中で頼まれたものの修理や自らの研究に没頭している。外に漏れるほど五月蠅い音がしていない限りはこうして呼びかけるだけですぐに出てきてくれる。

魔理沙の呼びかけに「はい」と中から返事が聞こえ、タタタッと走ってくる振動を感じた。

—ガチャリ。

小屋の扉が開きにとりが姿を現す。

「はい、どちら様ですかー。ん？ ああ、魔理沙に霊夢じゃないか。いらっしゃい。今日は何の御用時で？」

にとりは二人の顔を見ると砕けた笑顔を見せた。

「早苗に聞いてきたの。『クーラー』をうちの神

社にも作ってくれないかしら？」

「妖怪の山よりも博麗神社は暑くてさー。もう私たち汗だくでまいてるんだ。なんとかならないかな？」

「うーん、そういうことならお任せあれ！ すぐにでも作りに行っておあげるよ！ ...って.....言いたいところなんだけど、ごめんね。実は早苗のところでパーツは全部使ってしまったって、もう余りがないから作れないのさ」

にとりは一瞬ぼろとした表情を浮かべて二人に話した。

「なん.....だと.....」

「なあ、どうしても無理なのか？ どっかでそのパーツはないのか？」

にとりならば快く引き受けてすぐに作ってくれるだろうと思っていた二人にとってにとりの発言は予想外のことだった。

「そうだねえ.....もう少し待ってくれればパーツも作れるんだけど、今すぐに作るのは無理だねえすぐに欲しいなら早苗のところの『クーラー』を外すくらいしかないし...」

ピクリと二人の耳が反応した。

「なんだ、それなら簡単

じゃない♪ さあ、早速行くわよ」

「えっ？」

「だな。善は急げだぜ！」

「えっ？ えっ？」

二人はいきなりにとりの腕をガチッと掴みあげ、ずるずると連れて行った。

「えっと、もしかして守谷神社に行くの？」

「うん。他にどこに行くっていうのよ」

「でもせっかく取り付けたのを外のはちょっと...もう少し待ってくれたらパーツも作れるから...」

「駄目よ。私たちは今暑い。一度あの涼しさを知ってしまった私たちは、『クーラー』なしで過ごしていたあの頃にはもどれないのよ...」

「そうそう。それに外すっていても大丈夫。ほんの少し借りるだけだから。にとりが新しい『クーラー』を作り終わってつけてくれたらちゃんと返すって」

「うーん.....いいのかなあ...」

二人のニヤニヤした顔を前ににとりは複雑な思いを抱いたが、がっちり両側から掴まれた腕を振り払うことはできず、結局そのまま連れられて行くのだった。

◇守谷神社 室内◇

「さーなえー」

外から早苗を呼ぶ声がした。声から判断するに霊夢だろう。無事ににとりに話をつけてきたのだろうか。早苗はお茶を机に置くと障子に近付いた。

—スッ。

障子をスライドさせると庭に霊夢と魔理沙、にとりが揃っていた。

「あらお揃いで。その様子ではにとりさんに了承して貰えたみたいですね」

「ええ。にとりは心よく返事してくれたわ」

「ああ。さすが私たちの盟友だな」

「...うー」

霊夢と魔理沙はニコニコと笑いながらにとりと肩を組み合っている。なんと微笑ましい光景だろうと見ている早苗もつられてニコニコと微笑む。しかし実際は、にとりは二人に掴まれ思うように身動きが取れず、二人はその笑顔の下に邪な思いを抱いているわけだが。

「ねえ早苗。そのことで少し問題が出てきたの。実は『クーラー』を作る

のに必要なパーツが足りなくてすぐには作れないらしいの」

「おや、そうなんですか」

「ああ。そこでどうしようかと三人で話し合っていたんだが、パーツ自体はそれほど時間をかけずに作れるそうなんだ。それでも四日はかかるんだとき。な、にとり？」

「あ...うん...そうなんだ。最初から作らなきゃいけないからそれくらいはかかる」

「そうなんですか。よかったですね♪ 霊夢さん、魔理沙さん。にとりさんが作り終われば快適に生活できますよ」

早苗はその報告を自分のことのように喜んだ。

正直、早苗は幻想郷に来てからの生活に最初のころはとても困っていた。四季がはっきりしている幻想郷では夏は自然の風と日陰で過ごし、冬は囲炉裏で暖を取る程度しかできないと知ったからである。これは何不自由なく暮らしてきた早苗にとって大きな衝撃を与えた。早苗のいた世界では夏は涼しく、冬は暖かく過ごす術がいろいろとあった。しかし幻想郷にはそれが無い。困り果てた早苗を

助けてくれたのがにとりだった。持ち前の技術力で早苗が説明したとおりの『クーラー』を作ってくれた。しかもコンセントのないここでも使えるように改良して。

だから早苗は自分と同じような悩みを持った霊夢や魔理沙の問題が解決したのが素直に嬉しかった。

「それでね。早苗にお願いがあるの」

「そう、とても大事なお願いがあるんだ」

「はい？　なんででしょうか？　私にできることであれば可能な限りお手伝いいたしますよ」

早苗のその言葉に二人はニヤリと口を歪ませるにとりは二人の顔を間近で見てビクリとした。

「じゃあ言うわね、あのね……早苗のところに『クーラー』を私たちに貸してほしいの」

「……はい？」

一瞬早苗は何を言われたのかわからなかった。しかし数秒考えると驚きながら霊夢に言い返した。

「な、なに行ってるんですか！？　今作ってもらえるって言ってたじゃないですか！」

「ああ。四日後くらいにはな。でも私たちは今暑いんだ。だからさ、な？」

「な？　じゃありませんよ！　駄目です！　絶対にそれは駄目です！　私だって『クーラー』がないと困るんです」

「ケチ。さっき可能な限りって言ったじゃない。巫女が嘘ついていーわけえ？」

「べ、別に嘘じゃありません。ただその要求は不可能だということです」

「ふーん…そう。なら仕方ないわね」

早苗はほっと胸を撫で下ろした。いくら無茶苦茶と噂の二人でもさすがに理不尽なことはしないだろう。そう思い早苗は少し下げた顔を上げた。

そこには無数の星があった。

「え？」

「魔符『スターダストレヴァリエ』縮小版」

早苗が隙を見せた瞬間に魔理沙はスベルカードを発動していた。あまりの至近距離で発動されたものだから、早苗もそれに反応することができなかった。瞬く間もなく星の流星群を浴び、その場に倒れこむ。

「よし！　さあ、今のう

ちに運び出すわよ。にとり、さっさとやっちゃって♪」

「あーあ...私知らないよ後でどうなっても...」  
しづしづながらもにとりは『クーラー』を取り外す作業を開始した。

#### ◇博麗神社 室内◇

—ブオー—。

博麗神社の室内に小さな機械音が流れていた。室内では畳に寝転がる霊夢と魔理沙の姿があったさきほど早苗から奪い取ってきた『クーラー』をにとりに早速つけてもらいその性能を試していた。

「いやー極楽極楽。これならいつでも涼しくできるし、もう私他になんにもいらないわ」

ゴロゴロと寝返りをうちながら霊夢は言った。

「もう外に出たくないな。ずっとこの部屋で過ごしたいぜ。これだけ快適なら魔術書も持ってきてここで読めばよかったな」

魔理沙もゴロゴロと寝転びながら呑気に言った。

「いいのかなー.....無理やり奪い取ってきたけど...」

二人が心から『クーラー』の恩恵を受けている姿に少しの喜びを感じながらも、早苗から無理やり奪ってきたことにとりだけは罪悪感に苛まれ部屋の隅でこじんまりとしていた。

「いいのいいの。こんな素晴らしいものを一人占めしてた罰よ。閻魔に代わって私が罰した」

「右に同じ」

畳に寝そべりながら二人は緩んだ顔でとても理不尽なことを言う。

◇守谷神社 室内◇

「...う...んっ.....」

身体がひんやりとする頬には硬い感触があった。早苗はゆっくりとその場で眼を覚ました。初めに見えたのは縁側の木でできた床部分だった。少しずつ意識が戻ってくると身体を起こした。

「私は... 一体..... はっ！ そうだ、魔理沙さんがいきなり私に向かってスペルカードを使って...」

次第に気絶する前の記憶が早苗の中に蘇ってくる。それとともに二人に対する怒りが早苗の中でふつつつと沸き立っていた。

「あの二人は.....もう許しませんよッ！ 私に攻撃したばかりか大切な『クーラー』まで盗んでいくとは言語道断ッ！ 例え地獄の閻魔が許そうともこの私が許しませんッ！」

早苗は立ち上がるとスタスタと部屋の奥の方へ

と進んだ。

幾度か襖を開けていくとやがて諏訪子と書かれた木のプレートが架けられた部屋に辿りついた。早苗は軽くノックをすると室内に入った。

「ん？ ひゃんっ！ さ、早苗...」

そこにいたのはちょうど湯に浸かり終わり、部屋で浴衣に着替えているところの諏訪子だった。

「諏訪子様、今お暇ですよね？」

「いやいやいや、どう見ても今お取り込み中だよ？」

「そうですか。それはよかったです。お暇なのですね。ではちょっと私に手を貸してください」

「あの一早苗さん？ あ、ちょ、ちよっちよっと待ててば！ まだちゃんと浴衣着てないし... ってか下着もまだなんだよー!？」

「さあ急がなくては。最大速度で参りますよ」

「うわーん！ 早苗話聞いてよー」

その後なんとか早苗を抑えて着替えだけ手早く済ました諏訪子は早苗と共に博麗神社に向かった。

◇博麗神社 裏庭◇

「博麗霊夢——ッ！ 霧  
雨魔理沙——ッ！ 出て  
きなさあ——いッ！」  
早苗の声が辺りに響き  
渡る。

二人はちょうどとう  
とし始めた頃にいきなり  
外から大声で名前を呼ば  
れた。相手は言わずもが  
な、早苗である。霊夢は  
めんどくさいので相手に  
しないでおこうと思った  
が、一向に帰る様子がない  
早苗にいらだち立ち上  
がる。

——ガッ！

勢いよく襖を開けると  
早苗と諏訪子が立っていた。  
外はすでに西日が照  
りつけ、いい感じの橙色  
をしていた。そのうち虫  
の鳴き声も聞こえてくる  
ことだろう。

「しっこいわねー。いい  
加減あきらめなさいよー」

霊夢は早苗に向かって威  
嚇するように言い放つ。  
それと同時に霊夢の手の  
周辺にある弾幕が弾けて  
早苗めがけて襲いかかる。

早苗は先ほどの不意打  
ちのようにはいくまいと  
その弾幕をさっと後ろに

飛んで避ける。

「あきらめられますか！  
私は現代っ子の見本のよ  
うなもの！ クーラーな  
しでは夏が越せません！」

早苗は心の叫びをあげ  
た。しかしそんなことは  
霊夢たちにはわからない。

「まあ私たちは別に大丈  
夫なんだけど、早苗がな  
いと困るって言うしね」

諏訪子は少し苦笑した。

「だがな、私たちだって  
こいつの性能を知ってし  
まったからには渡せない  
ね。欲しけりゃ力づくで  
やってみな！」

魔理沙はそう言って早  
苗を挑発する。

「ええ、そのつもりで来  
ました。先ほどは不意打  
ちを喰らいましたが、今  
度はそうはいきませんよ！

あなた方に奇跡の力と  
いうものを思い知らせて  
あげましょう！」

早苗がそう言うと、霊  
夢と魔理沙は二手に分か  
れて空に飛びあがった。  
それを見て早苗は霊夢を、  
諏訪子は魔理沙を追いか  
けた。

◇博麗神社 西上空◇

霊夢は颯爽と飛びなが  
ら後ろから追跡してくる

早苗に対して弾幕を張り続けた。

「もうッ！ しつこいわよ！ いいかげんに帰りなさいよー」

「ぜー——ったい嫌です！ あなたこそさっさと『クーラー』を返しなさい！」

「はあ？ 何言ってるの嫌に決まってるじゃない」

「ムキ——ッ！ もう怒りました！ 覚悟なさい！」

早苗は手に握っていた幣を握りしめる。それをさっと振りながらスペルカードを発動させる。幻想郷に来てから早苗の中にあつた常識は崩壊し、ここでの生活のために自身の能力も変化した。それはもちろんスペルカードについても同じことだ。

「奇跡『ミラクルフルーツ』！」

早苗がスペルカードを発動させると辺りに赤い弾幕が出現した。弾幕は数秒もしないうちに弾けそれにより更に細かな弾幕が無数に生まれる。それらは霊夢めがけて一斉に全弾発射された。隙間を抜けた先にまた新たな弾幕が何重にも現れるや

かいな弾幕である。

「あーそれめんどくさいわ。そっちがその気ならこっちも最初からクライマックスでいかせてもらうわよ！」

早苗のスペルカードが無数の弾による範囲攻撃なら霊夢はその逆だった。

近づくミラクルフルーツの飛礫を寸でのところでいくつも回避しながら霊夢は早苗との距離を測る。早苗は普段ならそうそう近寄ってはこないが、これほどまでに敷き詰められた弾幕をスラスラと避ける霊夢を見て本人も無意識の間に前に前にと近づいていた。霊夢はもちろんそれを見逃さない。

「ふん。不用意に近づきすぎよ。後悔しながら喰らうがいいわ！」

霊夢はそう言うとスペルカードを発動した。

—宝具『陰陽鬼神玉』。

霊夢の手元に一つの大きな弾が作られる。その光は神々しく、見る者を圧倒する。それは例え現神人である早苗であっても例外ではない。その光に一瞬早苗が隙を見せる。その刹那。霊夢は手に集まった弾幕を弾幕から身を守る盾のようにかざし、敵を切る剣のように振り

弾幕を蹴散らした。目前には茫然としている早苗がいた。

早苗は眼前に霊夢が近づいてきたのが見えてハッとした。早苗が集中を取り戻すのに要した時間はほんのわずか。だがそれだけで霊夢には十分だった。身体を前に押し出し、腕を伸ばして早苗に手を届けようとする。二人の間にほぼ距離はなくなった。

「これでおしまいね。出直してきなさいな！」

霊夢は至近距離で手の中の弾を早苗めがけてとき放った。早苗は両手をクロスしてガードを固めたが、いかせん距離が近すぎた。そのまま押し切られおもいきり後ろに吹っ飛ばされる。

「ふう……いやー危なかつたわ。あんなに弾幕張られちゃ後一分も持たなかつたわよ。そういう意味じゃ褒めてあげるわ。ただ、いくら弾幕張っても本人がこっちの射程距離に居ちゃ話にならないわね」

霊夢はそう言い放つと颯爽と立ち去ろうとした。

「ま、待ちなさい」

「えっ」

霊夢は驚き後ろを振り返った。そこにはまとも

にあの弾を喰らったはずの早苗が立っていた。

「嘘…なんで立ってんのよ……あーもう！ あんたしっこすぎるわよ」

「言ったでしょう。私は絶対に『クーラー』を渡さないよ…」

二人はにらみ合ったまま硬直する。どちらにも最早余力はなかった。早苗はフルパワーで弾幕を打った後に霊夢の攻撃をまともに喰らい、霊夢もまた早苗の弾幕を避けきるのに集中力を使い果たし更に一撃必殺の弾幕を放ったことからパワーが残っていなかった。

先に動いたのは早苗だった。霊夢は身構えた。次また大量に弾幕を張られては避けきれない。最低限度の防御もしなくてはならない。そう思い早苗の動きに注意した。しかし霊夢の予想は外れた。

「ん？ ちょ、どこ行くのよ」

「ふん。もうあなたと戦うのには疲れました。今のあなたには私に攻撃する余力はないみたいですし、今のうちに『クーラー』は返してもらいます！」

早苗は言いきる前に霊夢に背を向けて神社の方

に飛び立った。

「なっ...させるもんですか！」

早苗が飛んで行くのを見て慌てて霊夢も後を追った。

#### ◇博麗神社 東上空◇

霊夢たちとは真反対の方向に飛びだした魔理沙だったが早苗よりも諏訪子の方がやっかいそうだといまさらながら思い、どうにかならないものかと思案していた。しかしあまり時間をかけるわけにもいかず、結局はいつも通りの力押しで行くことにした。

「まったく。いつから神様はそんなに安請け合いするようになったんだか」

「あはは。本当は手出ししない方がいいかなーとも思ったんだけど、二対一じゃさすがに可愛そうだからね。それに、話を聞く限りどう考えても悪いのはそっちだし。さて

そろそろおしゃべりはいいかな？ 早く帰って早苗には夕食の準備をしてもらわないといけないからさっさと終わらせるよ！」

「くっ！」

言い終わるやいなや諏訪子は前を飛ぶ魔理沙の後ろからいきなりスペルカードを発動させる。

「神具『洩矢の鉄の輪』」

幾重にも重なる金色の輪が魔理沙を目掛けて襲いかかる。

「そんな弾幕に負けてられるかよ」

魔理沙は大きな輪を大きく旋回しながら、小さな輪の隙間を縫うように高速で飛び抜ける。

「やるねえ。でも、これはまだまだ序の口さ。さあ！ スピードアップするよ！」

そう言うと諏訪子は手のひらを外に向け両手を大きく横に開いた。そして眼を閉じると集中し始めた。

それを見た魔理沙はぐつと息を飲んだ。やばい。本能がそう告げた。おそらくだが、次に来る弾は避けることはできないだろうと。だから魔理沙も避けるのをあきらめ正面から諏訪子と対峙する。

軽く息を吸い込み閉じた眼を開き活をいれる。諏訪子は鋭く魔理沙を睨みつけた。

「さあさ、とくとご覧あれ。土着神諏訪子のシヨタイムさ！」

—パンッ！！

諏訪子は開いた両手を打ち合わせた。それを合図に先ほどの輪が急旋回をして魔理沙に向かう。その速さは先ほどとは比べ物にはならない。魔理沙が最速で飛んでギリギリ当たるか当たらないかの勝負になるだろう。

だが魔理沙は動かない。今からではもう逃げても間に合わないことは分かり切っているからだ。今はひたすらに集中する。

「...まだだ」

ものすごい速さで近づく輪を前に魔理沙は冷静にその動きを視る。

「...まだ.....もうちょい」

すっと手を前に上げる輪が魔理沙に到達するまで後何秒もない。

「へえ.....案外落ち着いてるねえ...でも...」

諏訪子は何かを言いかけてやめた。そしてもう一度両手を広げる。そのままのポーズで魔理沙の出方を窺う。

魔理沙は眼を大きく開

き、迫りくる輪に向かって手をかざした。

「.....今だッ！ 喰らえ！」

恋符『マスタースパーク』

ズドおおおっおおおおおお！！！！っと言う大きな音が山に響きコダマする。

迫りくる輪を眼前ギリギリまで見切り、マスタースパークが放たれた。その巨大な光に吸い込まれるように輪が次々に光に消えていく。光はさらに広がりながら諏訪子に迫っていく。

「む、ちょっと厳しいかな。だが、それならば！」

諏訪子は開いていた両手をパチン！と閉じると続けざまに三度手を合わせた。

—パン！パン！パン！

...しかし何も起こる気配はなく。ただただマスタースパークが諏訪子に到達しようとしていた。

「へっ、神様と言えども所詮はこの程度か」

周囲の輪を全て飲み込んだことで魔理沙は余裕の笑みを浮かべながら諏訪子に大口を叩いてみせた。これで挑発にのってくるならば更に隠し玉の

邪符『実りやすいマスターパーク』を続けて放つつもりだった。だが...  
「んっふっふ。それはどうかな？」

諏訪子は一つも焦ってなどいなかった。逆に不気味ほどの余裕をみせている。魔理沙は怪訝に思った。どうみても今からではマスターパークは避けられもしないし、あれを抑え込むほどの弾幕は幻想郷広しといえどもそうはいない。ではなぜ諏訪子はああも余裕そうなのか。

その時地面の方からドドドドド！と凄まじい地鳴りが聞こえた。

「なんだ？」

魔理沙は思わず下を見下ろした。

—ズド— —ン！

なんとそこには、すごい音を立てながら地面がせり上がってきていた。

「なっ...なんだとお！」

「合掌『だいだらぼっちの参拝』」

勢いよく伸びてきた地面はまるで巨人の両手のように諏訪子の前に出現した。そしてマスターパークが諏訪子に届く直前、それを合掌するような動きでバシン！と両側から挟みつぶしてしまっ

た。後から伸びてくる光も閉じたままの手が邪魔をして諏訪子には届かない。

「そ、そんなのありかよ.....」

「ほいさ」

魔理沙は驚き気が抜けていた。それを見越していた諏訪子は再び両手をパンと合わせた。

「あ」

魔理沙は辺りが急に暗くなったことで間抜けな声を上げた。そして何かを言おうとする前に後ろから伸びていた二つの土の手によって抑え込まれてしまった。

「ふう。これでお終いだね。なかなか楽しかったよ」

◇博麗神社 裏庭◇

にとりは一人でぽつんと佇んでいた。四人はそれぞれ飛んで行ってしまった。

「はあ.....」

なぜこうなったのか。自分はみんなに喜んで貰っていただけなのに...。どうしてこうなったのか。というと霊夢と魔理沙のせいなのだが、もとはと言えば面白そうだからと

『クーラー』を作った自分にも責任はあるのではないのか。

チラリとにとりは『クーラー』を見つめた。

「これさえなければ...みんな喧嘩せずに済むのかな」

◆

早苗と霊夢は神社へと戻る最中だった。ダメージを負っているはずの早苗が霊夢をややリードしながら飛んでいた。限界に近い早苗はここまでくれば気合だけが頼りだった。一方霊夢は先ほどまで『クーラー』の効いた部屋にいたのが暑い外に出て更に激しく動いたために身体がここにきて完全にバテていた。しかし『クーラー』を奪い返されてなるものかとこちらにも執念だけで早苗に離されまいと一定距離を維持しながら飛び続けていた。

◆

魔理沙は気絶していた諏訪子の攻撃により土の手に挟まれたまま意識を失い、その後地面に寝かされた。諏訪子はその傍で早苗が帰ってくるのを待っていた。辺りでは虫

の音が聞こえてきていた。

「諏訪子様ー」

「あ、早苗。おかえりー。どうだった？」

「えーっと、相撃ちって感じですよ。もうすぐ霊夢もこっちに来ます。ですから今のうちに『クーラー』を持って行きましょう」

「え、でもさ、あれってにとりちゃんに言わないと取り外せないんじゃないの？」

「.....あー！　そうでした！　迂闊ッ私！」

「はあはあ...やっとなりちゃんに付いたわよ。いい加減あきらめて帰りなさい。大丈夫よ、あんたたちのところはここより涼しいんだから。ほんの数日くらい我慢できるわよ。私が保証してあげるわ」

「あなたの保証なんてあてになるものですか！　にとりさん、『クーラー』を外してください！　私たちが持って帰りますんで」

「あ、何言ってるのよ！　にとり、そいつの言ってることなんてほっといて良いわよー。なんならもう帰っていいわー」

その時、神社の中から

にとりが出てきた。

「あ、にとりさん。ああっ、ありがとうございます！ 取り外して下さったんですね」

「あ、ちょっとにとり何勝手に外してるのよ！」

神社の中からでてきたにとりの背中から『クーラー』が少し見えた。どうやら取り外したものをリュックから出ているアムが握っているようだ。

その様子を見て早苗と霊夢がまた言い争いをしようとしていた。にとりはとても悲しくなった。自分の発明のせいで友人達が喧嘩をするのは悲しい。もしその原因がこれだというのなら……。

「こんなものがあるから…いけないんだ。…こんなもの一！」

にとりは大きく頭を振りかぶった。その動作で背中に背負ったリュックが霊夢たちの位置からもよく見えた。リュックの蓋から二本のアームが伸び出ている。その先には『クーラー』が握られている。

「「えっ」」

二人は同時に声を出した。にとりが頭を振りかぶった瞬間にアームが勢いよく曲がり、『クー

ラー』がそのまま投げ飛ばされたからだ。

—ブオンツ！

重たげな音がしてから『クーラー』が勢いよく空へと投げだされる。

「「あっ！」」

とっさの出来事に二人は慌ててしまった。いきなり投げられた『クーラー』がこっちに向かって飛んでくる。どうにかして受け止めなくてはならないのだが、如何せん動きが早すぎる。あまりに急すぎたために二人は自分に向かってくるものに対して反射的に弾幕を放つ。つまりは『クーラー』を狙ってしまった。

「「あ…」」

気付いた時にはもう遅い。二人の弾幕は同時に『クーラー』に激突する。

—ガコオオオオオンツ！

「「あああああああああー！」」

二人の弾幕を全て受けたクーラーは空中でバラバラになった。

—ガシャリ！ ガシャーン！ ガラガラ！

大小さまざまなパーツが地面に叩きつけられ、それぞれ違った音をたてる。

「「ああああ……」」

「……」

早苗は茫然とする。

「に一とーりー！」

霊夢は逆に激情した。そのままにとりの方に向かい、肩をつかんでガクガクと揺さぶる。

「なんで投げ飛ばしたのよ！ おかげでバラバラになってもうつかえな…」

そこまで言ったところでにとりの様子がおかしいことに気づき揺さぶるのをやめた。よくよく見るとにとりが少し震えている。顔が俯いているので表情はよく見えない。

—ぼたっ。

にとりの足元に一滴の水が落ちた。近距離で見ている霊夢にはそれが何かすぐに察しがついた。にとりの涙だ。

するとゆっくりにとりは口を開いた。

「…私はさ……皆に喜んでもらいたいから…いろんな…發明してるんだ…なのに……さ……私の發明で皆が喧嘩したら…嫌だよ……いやだよお……」

そこまで堪えていたものが決壊したようにワンワンとにとりは大きな声で鳴き始めた。今なら早苗からでもにとりの表情

が見えた。顔を悲しそうに歪めながら泣き崩れていく。

それを見て霊夢と早苗は顔を見合わせる。今まで『クーラー』を巡って争っていたのが急にバカバカしくなってきた。少なくともにとりをここまで泣かせてまで欲しいとは思わなかった。

そっと早苗はにとりに近付いた。

「ごめんなさい、にとりさん」

霊夢もそれに合わせた。

「ごめんね、にとり」

「私、自分のことだけ考えて、他の人にも使ってもらえたらいいなんて考えてなかったです」

「私も。早苗が涼しく過ごしてるの見て羨ましくなって、ずるいって思ってた。そのせいでこんなことになっちゃって…本当にごめんなさい」

二人は頭を下げてにとりに謝った。

「…っすん……ううん、いいんだ……わかってくれば……」

二人の心からの謝罪にとりの涙も収まった。

「もう少しまってね。そうしたらちゃんと新しいの作れるからさ。今度は二台同時に渡すから、ね。」

だからさ、もう喧嘩なんてしないで...ね」

様子を見ていた諏訪子は魔理沙を揺すって起こし始める。

「.....う...んっ」

ゆさゆさと身体を揺らすと魔理沙は声を出したしばらくすると眼が開いた。むくりと起き上がり辺りを確認する。

「...あれ？ 私は...」

「おはよー。もうみんな終わったよ」

諏訪子はそう言いながら指を指した。魔理沙は指された方を見てみると早苗と霊夢がにとりと握手していた。二人は少し頬を赤らめ、にとりは顔に涙の跡があるのが見えた。その後ろの方ではバラバラになった何かの残骸が見えていた。

「...ふーん。そっか」

魔理沙は何とかなく自体を察した。少し面白くなかったが、もうこれ以上は戦いはできないようだ。

諏訪子はにこりと魔理沙を見た後に三人に向けて言った。

「はいはい。皆仲直りしたところで、こんな提案があるんだけどどうかな

きっと皆で仲良く涼しくなれると思うよ」

三人はくるりと身体をこちらを向けて話を聞き始めた。

#### ◇博麗神社付近◇

辺りはすっかり暗くなっていたが、一行は諏訪子の提案を受けて移動した。月明かりのみが辺りを照らしている。虫たちの美しい鳴き声が響く。

「よし、とうちゃーく」

先頭に行く諏訪子が号令をかけて止まった。そこには大きめの穴がいくつかあった。

「あ、ここは...」

「うん。地霊の異変のときにできた穴ぼこだね。いやーその節は迷惑かけたねー」

地霊の異変のときに沸いた温泉の横に向かった先。温泉は湧かなかつたが、怨霊たちが湧き出た際に追い払うために弾幕で打ち払い、その時にできた大きな穴いくつかあった。特に人が立ち寄るような場所でもないためにそのままに放置されていたのだが、ここにき

て利用価値がでてきていた。

「さて、ここからは私の腕の見せ所さ」

諏訪子はそういうと両手を広げて眼を閉じた。魔理沙はまたあれをするのかと少しびくつしたが他の者たちは何が始まるのかと辺りをきよるきよると見回した。

—パン！

諏訪子は広げた両手を打ち合った。開いては打ち、閉じては開く。それを幾度か繰り返すうちに辺りからゴゴゴゴゴと音が響いてきた。何事かと皆が身構えると突如穴の横からプシューと水が湧き出した。まるで温泉が湧いた時のように勢いよく。水は噴き上がるとすぐ横にある大きめの穴に溜まりだした。みるみるうちに穴に水が溜まっていく。

「へえー。器用なもんね」

「諏訪子様こんなことができたなんて…」

「えへっ。伊達に神様やってないからねー。おともういいかな」

再びパンと手を鳴らすと湧き出していた水が少しずつ収まっていった。

「よし。後はほっておいても大丈夫。さあ、入る

うか」

## ◇博麗神社付近 温泉横◇

一行は諏訪子の作った水浴び場に浸っていた。大きさ的には立ったら胸の辺りまでくらいの深さと十人ほどは余裕で入れるほどの広さだった。

「あー気持ちいい。もうずっと浸かっていたいわ」

霊夢は水に浸りながら夢心地だった。ここならば長い距離を飛んで山の川に行く必要もない。それに水に入っていて冷たすぎると思えばすぐに横の温泉にも移ることができる。問題は着替えるようなスペースがないことだが、それはまた後でどうにかしようと思った。

「ふー極楽極楽だぜ」

魔理沙も霊夢同様に水に浸かりきっていた。先ほどまで気絶していたためか初めは頭がぼんやりしていたが、水に浸かることで完全に目が覚めた。

「気持ちいいです」

たまに川で水浴びする

早苗も、川ではゆっくり肩まで浸かったりすることは深さ的にできなかつたためとても気持ちよさそうにしていた。

「うきゅー」

にとりはさすが河童というところだろうか。一番に水に入りこんでプカプカと浮いていた。先ほどのまでの泣き顔が嘘のようにととても満足げな顔をしている。

「あはは。喜んでもらえてよかったよ。さっき魔理沙と戦ってるときにチラってここが見えてね。ここをプールみたいにしたら気持ちいいんじゃないかって思ってさ」

みんなはゆったりと水に浸かってくつろいだ。あまり浸かりすぎても風邪をひいてしまうため適度な時間に出ることにはなっているが、時間が来るまでは存分に満喫しようとしていた。

「はあ、そもそもそう言えばなんで『クーラー』の奪い合いになったんだろうな」

「お二人ががめついからですよ」

「いやいや、そうじゃなくてさ。初めは何してたんだったかなーって思ってさ」

「ほら、あれよ。暑いからチルノ探してたんじゃなかったかしら。途中から『クーラー』が見つかってどうでもよくなって忘れてたけど」

霊夢はそう今日の午前中の出来事を振り返りながら話した。

「うん？ チルノってあの氷の妖精？ それなら私がやっつけたけど」

「「...えっ？」」

諏訪子の発言に二人は反応した。

「いやー私の友達の力エル達をいじめてたからさー。思いっきりぶっとばしてやったよ」

自慢げに語る諏訪子であったが、霊夢と魔理沙はプルプルと震えていた。まさか諏訪子が原因なのかと思うと無性に腹が立ってきたのだ。

「...それで、チルノは今どこにいるのかしら？」

できるだけ笑顔を取りつくろいながら霊夢は質問する。こめかみ辺りがピクピクと疼いていた。

「うーん、もうとっくに再生してる頃だろうから湖にいるんじゃないのかな」

あっけらかんと言う諏訪子の姿に二人の感情が沸点を迎えた。ザバッ！

と立ち上がるとそのままのんびり泳いでいる諏訪子を前後から挟む。そして魔理沙が諏訪子の腕を後ろからがっちり掴み、霊夢が前から諏訪子の頭をぐりぐりと拳で締め付ける。

「お...お前のせい  
かー!」

二人の怒号が飛ぶ。

「ひゃん! 何するのさ...  
って痛ったたあああああ  
ああああいつ!」

「あんたのせいでこうな  
たんでしょうが!」

「お前がそんなことしな  
きゃ、私たちは苦勞せずに  
済んだんだよ!」

諏訪子はたまらず逃げようとするが魔理沙がそれを阻む。小さな諏訪子の身体ではその腕を振り払う力はなかった。

何度も小言を言われては悲鳴をあげる諏訪子を見てにとりと早苗は顔を見合わせてくすりと笑った。

空にはいつの間にか綺麗な満月が浮かび上がり星々が輝いていた。雲はほとんどなく絶好の月見日よりと言えるだろう。にとりは『クーラー』を完成させたら次はみんなで宴会を開いてみたいなと思った。

心地よいはずの風が肌に冷たい。そろそろ出なければ風邪をひいてしまうだろう。諏訪子への制裁も済んだらしく、霊夢と魔理沙は再び水に浸かり、諏訪子はぶくぶくとうつ伏せになって浮かんでいた。

幻想郷はまだまだ暑い夏が続きそうだ。

FIN